

## 怪傑ハリマオの歌

途上国にいと、変なところで、過剰に政治的になってしまう。別段、特別の政治信条を持っていないし、社会のありようを考える知力もないから、その方向性はあっちを向いたりこっちを向いたり出鱈目で方向性がない。その場の雰囲気とかちょっとした周りからの刺激で、脈絡もなくある右にも左にも向く、ある種の情緒というか感情のようなものである。

何を言っているのかわからないと思うので、具体的に話す。

たとえば、南十字星というのがいけな。低緯度地方にいと、夜、南十字星を探したくなる。うまく見つからない時もあるのだが、探していると、ある歌が頭の中に浮かんできて歌いたくなる。それは「怪傑ハリマオ」の歌だ。「空の果てに十字星」という歌詞があり、南十字星は、高度が低く水平線近くに見えるから、この歌詞の通りなのだ。この歌によって南十字星という星座の存在を知ったのでどうしても、唄を思い出してしまう。この歌は、1960年から日本テレビで放送された「怪傑ハリマオ」の主題歌で、三橋美智也が歌っている。民謡歌手である三橋美智也の声は高音に伸びがあり、メロディーが耳に残る。今ならば、氷川きよしの声が合いそうだ。放送されたドラマを今見ると、演技もカメラワークも素人同然で、笑ってしまう。ほとんど同時に、少年マガジンで「怪傑ハリマオ」の連載が始まり、石森章太郎が絵を描いている。テレビドラマもマンガも今でも手に入るから、内容はそちらで確認すればよい。それはそれとして、正義の味方「怪傑ハリマオ」という設定は、あまり穏やかではないなと思う。

テレビドラマのハリマオには手下がいと、彼らはソンコックという、マレーシアやインドネシアのムスリムが被る帽子を被っている。Harimau とはマレー語で虎の意味である。Harimau Malaya 「マレーの虎」というのは、谷豊という実在の人物の通称である。谷豊は、第二次世界大戦の初期、シンガポール陥落（1942年2月15日）に至るマレー作戦の前段階で、日本の特務機関F期間（藤原機関）の職員として活躍した民間人である。「正義の味方ハリマオ」というのは、日本軍の諜報機関の職員である谷豊が「正義」の味方だという意味になる。

F機関のFは、friendship, freedom と機関長の藤原岩市のイニシャルのFであり、機関の特務とは、諜報活動、宣伝戦、心理戦、民心獲得工作などである。その貢献として最も有名なのは、インド国民軍（INR）の創設であった。東条英機はインドを大東亜共栄圏に含めることまで考えていなかったが、インドの独立を支援して、インドからイギリスを追い出すことを考えていた。インド解放・独立はF機関の目的の一つであり、F機関の長、藤原岩市はシンガポール陥落の2日後、降伏したイギリス軍のインド兵（英印軍 BIA）を集めて、日本

の戦争目的が、大東亜共栄圏の理想の実現であり、インドの独立の支援であることを語り、日本の支援でインドの独立を目指すインド国民軍(INA)への参加を呼びかけた(Farrer Park Address)。これに答えて 10000 人もインド将兵が INA に参加した。

谷豊とそのグループは、マレー半島上陸にそなえた、イギリス軍の基地建設の妨害や、日本軍の侵攻に先立つ、現地住民の宣撫などの情報戦がその任務であった。彼は、2歳の時に両親とともにマレーシア・クアラ・トレンガヌに移住し、その後何回か日本に戻っているが、青春時代をマレーで過ごし、マレー人の友達を多く持っていた。1934年、彼が日本にいたときに、彼の幼い妹が中国人の暴漢に虐殺された。残酷な殺し方で、首を切ってもてあそび、晒しものにした。それに対する怒りから、彼はマレーで匪賊の首領になった。匪賊と言っても一種の義賊で、人は殺さず、白人やそれにつながって利益を得ている華僑から金品を奪って、貧しいマレー人に与えたので、多くのマレー人に慕われた。日本の特務機関が彼に注目したのは、彼が多くのマレー人の手下を持ちマレーシア人に慕われていたからである。当初、日本軍への協力を拒んでいた。彼の怒りは、妹の死に対して何もしなかった日本にも向けられていたのだ。シンガポール陥落後まもなく、谷自身はマラリアが悪化して死ぬのだが、白人の作った特効薬であるキニーネを飲むことを拒否して、マレーの民間薬を飲み続けた。彼は、イスラム教徒に改宗し、マレー人の女性と結婚した。彼は、マレー人として死んだのである。谷の戦争目的は、日本防衛でも、日本の領土拡大でもない。イギリスの植民地主義に抑圧されている、彼の仲間であるマレー人の解放だったのである。

何のために戦争をするのか、目的のない戦争はない。どんな戦争でも、何らかの目的があり、その目的が「正義」とされる。それが本当に正義なのか、あるいは、その正義(戦争目的)が戦争の勝利によって実際に達成されるのかということは重要でない。人々、特に前線の兵士が、何らかの「正義」のために戦っていると信じるのが重要なのである。自分の命を犠牲にしても戦うべき「正義」があると思うから戦うのである。さもないと、命を賭けてまで戦おうとしないだろう。それなしに戦いを強制すれば兵士は脱走するか、最悪の場合には、命令した上官を殺して自分が助かろうとする。ウクライナの戦争では、ウクライナ人とロシア兵の戦意の差は明瞭らしい。自分たちの土地を奪われ、同胞を殺された者と、良く知らない土地に行って他人のために戦えと言われた者と、戦意に違いがあるのは当然のことだ。そのことが、兵力の差以上に大きく戦果に影響しているように思う。そんな状況で、戦わなければならないロシア軍の上官は、敵に撃たれるか、味方に撃たれるかという状態に追い込まれる、同情したくなる。それが嘘でも本当でも、とにかく、戦う前には、戦うための「正義」を兵士に納得させておくことが必要なのだ。裏返して言えば、戦争が継続されているということは、その「正義」が有効に機能しているということである。おそらく、敗戦の日まで、東亜の解放は、多くの日本人にとって「正義」だったに違いない。

そもそも、誰が見ても普遍的に正しい「正義」が存在するなどというのは幻想だろう。いわゆる大義名分というやつだが、その妥当性を客観的に納得させるのは難しい。よくあるのは、過去に遡って、そもそもこうだったから元に戻せというやつで、プーチンの大ロシア主義がそれだ。これは最も稚拙な説得の仕方だ。確かに、かつて、旧ソ連も帝政ロシアも広い国土を持っていたし、ウクライナもベラルーシもその中に入っていた。しかし、もっと前に遡れば、ロシア公国とキエフ公国は別の国だ、要は、都合の良い時代を切り取っているに過ぎない。そもそも論を繰り返して、最後までさかのぼると、人類全員アフリカへ帰らなければならない。これとは反対に、未来の理想に向かってこうあるべきだという正当化のやり方もある。これも大して説得力がない。どんなに理想的な社会を作っても、人間が作る社会には欠陥や不正がつきものだから、あるべき理想というものも所詮は主観に過ぎない。どの湯に説得力を持たせるか、政治的には大問題だ。「正義」とは何かというのは大きな哲学的問題だが、そんな大議論をこの小論でしたいとは思っていない。ここで確認したかったのは、戦争を維持するためには、説得力のある「正義」のような何かが必要だということであり、かなり長い間、戦争が継続されたのだから、日本人の多くが、その何かを共有していたと考えるべきだ。

F機関の藤原は中野学校の教官だった。日本の降伏後、藤原はシンガポールで尋問を受けている。その尋問で「何故、短期間にインド国民軍を組織するという大成功が納められたのか」という英軍探偵局長の質問に対して、「至誠、信念、愛情、情熱をモットーとし、敵味方、民族の違いなく、彼らに実線感得させる以外にないと部下と誓い合った。」と答えた。小野田寛郎は陸軍中野学校二俣分校の第一期生で、中野学校の教育の根幹は、「謀略は誠なり」ということだと言っている。謀略とは人を欺くことで、誠とは言行が一貫して人を欺かないことだから、この言葉は矛盾している。しかし、良く考えると、謀略が成功するためには人に信頼されなければならない。日ごろから表面的な言葉をもてあそび言行の一致しない人間を人は信頼しない。工作のために現地工作員と関係を作っていくには、人を裏切らない誠実な人柄が必要だ。「誠」は新選組の専売特許というわけではなさそうだ。「誠」は、言葉に出したことを必ず実行するということなのだろうが、それならば、陽明学の知行合一（知識は実行によって完結する。）に近い。そうすると、官軍側だろうが幕府側だろうが、その根本思想においてあまり違いがない。とにかく、日本人は誠が好きらしい。確かに、日常生活の中で誠実な人は人の信頼感を得るのだが、誠は主観的な思いだから、複雑な実社会でこれをやたらに実践すると、たいへん迷惑なことになる。三島事件で、三島由紀夫は確かに市ヶ谷で知行合一を実践して見せたのかもしれない。しかし、割腹自殺された市ヶ谷の自衛隊はたいそう迷惑しただろう。第一、後始末の掃除が大変だ。私は、おと一さん、おか一さんから、他人に迷惑をかけてはいけないと教わった。複雑な世の中の利害と関係する政治や軍事には、経済も含めて客観的な合理性が必要で、主観的な思いである「誠」で政治や軍事を動かされても困る。

マレー作戦の後のインパール作戦は日本軍の大敗であるが、兵站、補給を無視して行って、7万人もの戦死者を出した。その6割は食糧不足による餓死とマラリヤ等による病死である。戦争の一面は費用対効果の高い兵力の配分と効率的な兵站の確保という一種の経済学である。合理性を無視してこの作戦を強行した牟田口廉也は、無能なる愚将として世界の戦史で知られている。実は、藤原も牟田口と同様にインパール作戦を支持していたので、インパール作戦の失敗の原因を牟田口だけに押し付けることはできない（藤原は戦後、牟田口を批判している）。藤原も同罪である。プーチンも旧ソ連の諜報機関であるKGBの対外情報部員であった。兵站を無視してウクライナ戦争を強行して窮地に陥っている。諜報部員には、大きな規模で行われている戦争の経済学は理解不能なのだろう。藤原に合理的な兵站の重要性を理解しろと言っても無理かもしれない。それなら何も口を出さなければ良いだろう。中野学校で教育された者は、語学に堪能であるが。教官であった藤原自身は、中野学校で教育されたわけではないので、英語が話せない。Farrer Park Address は、日本語－英語－ヒンズー語の二重通訳によって、インド兵に語られたが、この演説を最終的にヒンズー語して円雑したのは、マレー作戦によって日本の捕虜になり、藤原たちの説得によって、(INA:日本の支援によってインドの独立を目指すインド人の軍隊)のリーダーになったモハン・シン(Mohan Singh)である。彼は、インド独立後に国会議員になっている。藤原の成功はモハン・シンのヒンズー語の演説のうまさによるのかもしれない。その後、INA は日本陸軍のインパール作戦に参加するが、このころには英印軍からの捕虜に加えて、東南アジア在住のインド人の志願者を加えて、45,000人ほどに増加して、指導者は、スバス・チャンドラ・ボース(Subhas Chandra Bose)に代わっている。ボースはインド国民会議派の左派で、無抵抗主義を上げるガンジーには反対している。無抵抗主義という理想主義では独立派達成されないというのが彼の主張である。インパール大作戦は、中国大陸の蒋介石と国民党に対する、米英の物資の援助を遮断することが目的であったとされるが、ボースにしてみれば、インパール作戦成功しイギリス軍を弱らせて、一気にインドを解放することが、戦争目的だったに違いない。つまり、藤原にとっては、インパール作戦の実行は、INAに対する彼の「誠」だったのかもしれない。

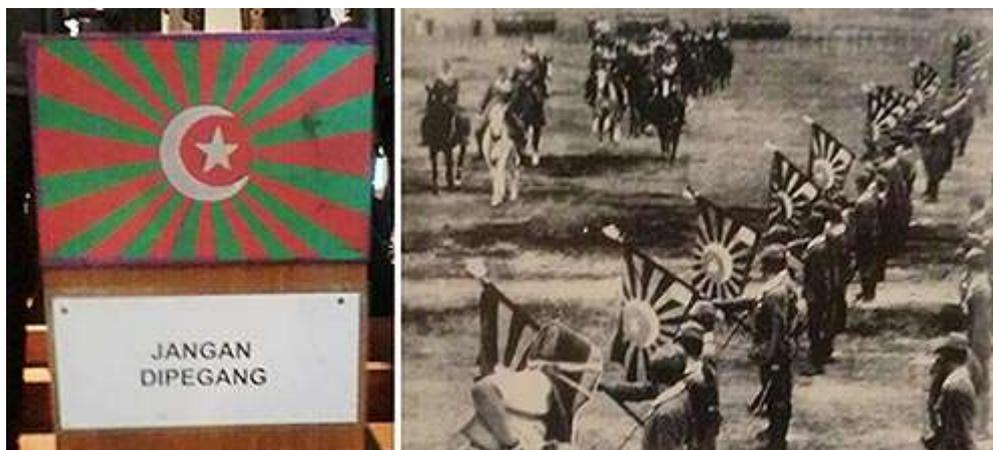
「誠」は主観的な個人の思いで、行動することによって達成されるから、それが客観的に正しかとか、それが成功したかということとは関係がない。日本軍は数々の作戦ミスを行っているが、しばしば出てくるのは、それまでに戦って戦死した将兵に申しわけないという理由で、圧倒的な敵の兵力を前に、逐次投入を繰り返して、最終的には兵力のほとんどを消耗してしまうという愚である。典型的なのは、戦艦大和の最後で、航空機の防衛もなく、特攻出撃して沈没し、3000人もの将兵を失うことに何の意味があるのか。確かに、死んだ戦友に対して誠を貫いてはいるが、そんなことを繰り返して戦争に勝つはずがない。

それはその通りなのだが、日本人である私には、誠という倫理観に共感がないわけではない。日本の敗戦後、残留した日本の将兵がインドネシア独立戦争に参加してオランダと戦い。ベトナム独立戦争ではフランスと戦っている。それも、数人という単位ではなくて、両国合わせれば、少なくとも 1000 人を大きく超える人数である。現地に残留した理由は様々であろう。日本に帰れない様々な理由があったのだろう。中には、戦犯として訴追されることを恐れた人もいたかもしれない。しかし、戦闘に参加すれば当然死の危険がある。経済的利益だけでその行動を説明することはできない。おそらく、彼らの多くは、彼らの「誠」を貫いたのだろう。谷本喜久男はベトナムで終戦を迎えたが、ベトミン（ベトナム解放同盟）幹部との交流により、ベトナム初の陸軍士官学校クワンガイ陸軍中学の教員となり、後に、山岳遊撃戦に参加してフランス軍と戦っている。谷本は陸軍中野学校二俣分校の第一期生で、小野田寛郎と同級生である。谷本の陸軍における任務は諜報・工作活動だったのだろう。当然、複数のベトナム人工作人員と関係を持っていたはずであり、そのルートでベトミンとの関係が出来たのだと思う。おそらく、谷本の第一次ベトナム戦争参加の動機も「誠」だったのだろう、

インドネシアは 1949 年にオランダから独立。1953 年にラオスは完全独立し、カンボジア王国が独立した。1956 年には、フランスはインドシナから撤退して、南北ベトナムができる。1957 年にマラヤ連邦が独立した。インドの独立は 1947 年であるが、そのきっかけはイギリス・インド政府が、日本軍に協力した INA の将兵を反逆罪に問おうとしたことに対する民衆の蜂起であった。「至誠天に通ず。」アジアの解放を信じて散華した人々の誠は天に通じたのである。このような見方に対して、大東亜共栄圏などは、日本の植民地支配のための口実であり、現に、いくつかの例外を除いて、日本軍は占領地を直ちに開放していないでないかという意見がある。結果論としては、私もインドネシアやビルマを直ちに開放しておいた方が良かったと思う。しかし、敵の残存勢力とその同調者がまだ少なからずいる占領直後に、直ちに、現地政府を作り独立させるのは難しい。暫定的な統治から独立へ向けての一貫した流れを準備しておくことが必要なのだが、これが難しい。「誠」という視点に立つならば、「誠」で重要なのは一貫性であり、1 兵卒から大本営まで、その一貫性は貫かれていなければならない。戦況に応じて、独立させると言っても、実際に独立させなかったり、これでは現地の人々の信頼は得られまい。

一方で、「太平洋戦争によって日本がアジア各国の独立を早めた。」というのは、その動機や過程における正当性・倫理性の問題とは別に、否定しようのない歴史的事実だ。インドのセポイの反乱は 1857 年である。インドネシアは 300 年以上オランダの支配下にあり、1910 年代に独立運動が始まり、1926 年インドネシア共産党の蜂起があった。ベトナムのファン・ポイ・チャウによって反仏運動の「維新の会」が結成されたのは、1904 年である。フランスがラオスを保護国にしたのは 1905 年だが、このころからすでに反乱がおきている。カン

ボジア史は複雑で、特にシアヌークは時に応じて、あっちこちの国にくっついたり離れたりするののでわかりにくいですが、1920年代には反フランス運動があったようだ。つまり、長いところでは100年近く、短いところでも20年以上の反植民地運動があったのだが、独立に成功していない。それが、第二次世界大戦後、早いところでは数年の内に独立している（ベトナムは特殊で、第二次世界大戦後、フランスとの抗争が続き、北ベトナムが出来るのに10年以上かかっているが、ホー・チー・ミンの独立宣言は日本の直後、日本がフランスを駆逐してなれば独立宣言など出せなかった。）。これだけ、短い間にアジア各国が独立できたということは、その直前にそれを可能にする要因があるはずだが、そのような世界史的要因は、一時的とはいえ日本がイギリス、オランダ、フランスを東南アジアから駆逐したこと以外にない。その評価は様々だが、スハス・チャンドラ・ボースは、日本の敗戦まで、INAを率いて最後は、ソ連亡命を企てて、日本軍の協力によって台湾の飛行場から飛び立とうとして、飛行機事故で死亡した。現在、インドの国会議事堂の大ホールには、ガンディー、ネルーと並んで、彼の肖像が飾られている。郷土防衛義勇軍(Tentara Pembera Tanah Air:PETA)は、1943年日本の軍政下でインドネシアに作られた、インドネシア独立戦争では、PETAが中核となってオランダ軍と戦い、勝利した。現在、ボゴールにはPETAの記念館があり、武器・軍服・写真などの資料が展示されている。下の写真はその中の一つである。韓国人が見たら卒倒しそうな写真である。



[PETA 記念館 \(coocan.jp\)](http://coocan.jp)

もちろん、私は、太平洋戦争が日本の「聖戦」だなどとは言うつもりもない。歴史は、事実を客観的に記述しなければならない。それが正しいとか正しくないというのは、価値観やイデオロギーを含めて行われる評価で、歴史そのものではない。日本がアジア各国の独立のきっかけを作ったというのは、歴史的事実にもとづく評価の一つだ。

まず、価値観を排して事実をつぶさに記述して、その上で評価をするという経験主義的な態度は重要だ。科学はこの帰納法的作業の上に立脚している。今では、コンピュータを使った

シミュレーションなど、演繹的に妥当性を評価する手法もあるが。いまでも、実験科学や技術開発では経験主義は重要だ。だからこそ、できるだけ客観的かつ詳細に歴史を記述しなければならない。だが現実の社会は社会実験の場ではない。やり直しは効かない。アメリカは世界一の経済大国であり、アメリカは重要な科学技術や文化を作りだした。だからといって、インディアンを虐殺してその生活や文化を奪ったアメリカの建国の歴史を正当化することは出来ない。日本軍によって失われた命や生活・文化も大きかった。歴史を振り返ることによって、ある行為の妥当性を評価することはできても、正当性は評価できない。だから、「正義論」は哲学や倫理学の領域なのだ。

話を元に戻して、「怪傑ハリマオ」が放送された当時の時代背景を説明する。サンフランシスコ講和条約の締結は1951年9月28日で発行日は1952年4月28日である。この日に日本は再独立するわけだが、それまではGHQが厳しい言論統制を行っていた。GHQの言論統制は当時、一般の日本人に知らされない。検閲の内容には、当然、極東軍事裁判の批判やナショナリズムや大東亜協栄圏の宣伝が含まれている。峠三吉の「原爆詩集」のオリジナルが、ガリ版刷りで自費出版なのは、東京の出版社が発禁を恐れたからだと言われている。GHQの言論統制がなくなったとしても、サンフランシスコ平和条約は、日本が戦後に行われた極東軍事裁判の結果を受け入れることが前提になっている（11条：極東国際軍事裁判所並びに日本国内及び他の連合国戦争犯罪法廷（例として南京軍事法廷、ニュルンベルグ裁判）の判決を受諾）。東京裁判がいい加減なものだということは断片的ないくつかの記録からも明らかだが、再独立と引き換えに、日本は東京裁判について文句が言えないわけだ。この11条の法的解釈については、翻訳の問題を含めてさまざまな議論があるが、そもそも、当時の国際慣習法（アムネスティ条項：戦争中に一方の交戦国の側に立って違法行為を犯した者すべてに対して、他方の交戦国が責任の免除を認める条項。そうしないと講和条約が結べない。）を無視して、わざわざ11条を加えたこと自体が、当時の連合国側が、東京裁判等の法的な不当性を認識していたことをうかがわせる。つまり、自らの正当性に自信がなかったのが、反論の道を封じておきたかったのだ。東京裁判では、インドのラダビノード・パルが判事の中でただ一人、日本無罪論を展開し意見書を書くが、判決の中でそのことは公にされなかった。日本が再独立を果たすと、田中正明は、待ちかねたように、彼の意見書を抜粋・翻訳してコメントを加えて出版した「パール博士述・真理の裁き・日本無罪論」（1952年太平洋出版）。東京裁判の弁護人であった滝川政次郎は「東京裁判を裁く」（1952年東和社）を書いた。しかし、当時の国民的関心は、B、C級戦犯の釈放問題に集中していて、サンフランシスコ平和条約11条に関する国会答弁は、日本の戦犯釈放の権限についての解釈問題が主であった。日本政府が東京裁判の結果に意義申し立てができなくても、もちろん、言論として郷経裁判に異議を唱え、批判することはもはや勝手に、言論人・思想家としてはむしろそちらに集中すべきだったと思う

が、自民党・社会党の2大政党の対立という、いわゆる55年体制の中で、引き続いてアメリカとの関係を強化し、日米安保体制を維持強化したい自民党側の論客は、アメリカ批判につながりかねない東京裁判批判を抑えていき、ソ連・中国の影響下で、社会党側の論客は自虐論的東京裁判史観の維持強化に努める。このころのいわゆる「知識人」は太平洋戦争や東京裁判の客観的歴史評価を実質的にしていない。

一方で、1960年当時の一般の日本人の大人は、ハリマオが谷豊だということを知っていた。彼のマレー作戦に対する貢献は、1942年に新聞報道され、翌年(1943年)、戦意高揚映画として作られた大映映画「マライの虎」が大ヒットしている。ちなみに、「マライの虎」には「日本軍に協力して、悪鬼イギリスと戦おう。そして米英を東亜から追い払わなければいけないのだ。」というセリフがある。「怪傑ハリマオ」の原作は、山田克郎の「魔の城」で、児童向けの冒険小説として、1956年に日本経済新聞の夕刊に連載された。もちろんモデルは谷豊である。だから、この小説やテレビドラマの背景に、F機関の特殊任務に「正義」があるという主張がひそかにあるのだということを理解していたはずである。

「怪傑ハリマオ」の後ろには、こんな面倒くさい議論がある。試しに、誰かと太平洋戦争と東京裁判について議論してみると良い。かなり面倒くさい議論になる。1960年は60年安保の年であり、樺美智子が死んでいる。当時、全学連の中央執行委員長だった西部邁は、後に、当時の学生運動の参加者は、60年安保の条文をほとんど読んでいなかったと語っている。当時の首相は岸信介である。岸は、東条内閣の閣僚で元戦犯（不起訴となったが公職追放）である。東条内閣の閣僚（ただし、東条内閣を最終的に総辞職に追い込んだのは岸である。）の元戦犯が、強行採決によってアメリカと結ぶ条約だから反対するという極めて雑な論理なのだが、学生に限らず、文化人と言われる人も含めて、右か左化のレッテル貼りに終始している。当時の知識人なんてそんなものなのだ。うっかり、谷豊は「正義の味方だ。」と言ったら、どういうことになるのかわからない。そういう時代だったのである。山田克郎が何故、「魔の城」を書いたのか、調べてみたが、執筆の動機のようなものは残されていない。モデルにしたぐらいだから、谷豊の心情について、共感があったのかもしれない。児童向けの冒険小説に仕立てたのがうまかったのかもしれない。

長い文章になった。つまり、私の感想は、谷豊を児童向きの冒険小説のヒーローにすることを思いついて、よくテレビ放映までした。そして「怪傑ハリマオ」の歌は今でも私の意味の中に残っている。これはや仇の成功だ。難しそうな議論を展開したが、言いたかったことは、これって案外すごいことなんじゃないだろうかナアーという、極めて、お気楽なものなのである（長々ひっぱって、ゴメン）。

怪傑ハリマオの歌

作詞 加藤省吾

作曲 小川寛興

まっかな太陽 燃えている  
果てない南の 大空に  
とどろきわたる 雄叫びは  
正しい者に 味方する  
ハリマオ ハリマオ  
ぼくらの ハリマオ

天地鳴らし 吹きまくる  
あらしのなかも まっしぐら  
どとうも岩も うちくだき  
かちどきあげて 押しすすむ  
ハリマオ ハリマオ  
ぼくらの ハリマオ

空のはてに 十字星  
きらめく星の そのように  
7つの海を かけめぐり  
正義に結ぶ この勝利  
ハリマオ ハリマオ  
ぼくらの ハリマオ